

他者操作方略尺度作成の試み

筑波大学大学院（博）人間総合科学研究科 寺島 瞳

筑波大学心理学系 小玉 正博

Developing a manipulative strategy scale

Hitomi Terashima and Masahiro Kodama (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

This study develops a scale to evaluate strategies for manipulating others and to examine its reliability and validity. The results of a pilot study, with a questionnaire completed by 203 undergraduates, indicated that manipulative strategies consist of four quadrants: manipulating the feelings or actions of others from a superior position and manipulating the feelings or actions of others from an inferior position. Selecting 27 items from the pilot survey, a preliminary scale was administered to 402 undergraduates. Factor analysis indicated that 21 items on the manipulative strategy scale are consistent with a four-factor structure. This finding supports our expectations. The content validity and the factorial validity of the manipulative strategy scale were confirmed, and sufficiently high Cronbach's alpha and test-retest correlations support the scale's reliability. These results suggest that the scale can be used to evaluate manipulative strategies.

Key words: manipulation, manipulative strategy, reliability, validity

カウンセリング場面では来談者にとって重要な他者との間で体験される操作的な関係性への気づきが、もっともインパクトを持って取り上げられる（無籐，2002）。他者を操作する，もしくは他者に操作されるという現象は臨床場面のみならず日常の対人場面でもごく一般的に生起していると考えられるが，これまで十分な検討は行われていない。

臨床群における他者を操作する傾向としては“Manipulation”があげられる。“Manipulation”はB群人格障害者における対人関係を特徴づける行動様式とされている。日本においては，“操縦”（松本・石坂・金，1988），“他者操作性”（皆川，1990），“対象操作”（伊藤，1996）などさまざまな訳語があてられており，その用いられ方は一貫していない。本研究では，“Manipulation”が心理社会的な策略であるというSt. Clair（1966）の指摘を受け，以後“Manipulation”に“他者操作方略”という訳語を用いることとする。

Bursten（1972）は他者操作方略という用語が精神医学の中で頻繁に用いられているが明確な定義はされていないと指摘している。また，Hofer（1989）もしばしば臨床場面において用いられるがその定義はあいまいで心理学や精神医学の辞書にも記載されていないと述べており，他者操作方略に関してはその定義があいまいであるという指摘が多くなされている。

実際に他者操作方略に関しては研究者間で定義にさまざまな違いが見られる。St. Clair（1966）によると，他者操作方略は“攻撃や巧妙さ，ごまかしなどを用いて自らの攻撃性を満足させるために他者に影響を与える方略”を意味する。他者操作方略は，その動機の多くは無意識的であったとしても行動は常に意識され計画されたものとして定義されている。また，Hamilton, Decker & Rumbaut（1986）は，B群人格障害者などの臨床的記述をもとに，他者操作方略を“自分の利益のために魅力・説得・誘

惑・ごまかし・罪悪感の誘導・強制などを用いて故意に他者の行動に影響を与えたり、コントロールしようとする”と定義している。Hamilton et al. (1986) も St.Clair (1966) と同様に、他者操作方略が意図的であることを強調している。さらに、Bursten (1972) は、“Manipulative Personality” の概念を提唱している。この概念によると、他者操作方略は“他者をだまして影響を与えようとし、他者を負かすことで感情を高揚させること”とされている。Bursten (1972) は、“他者からケアを引き出そうとする方略”は他者操作方略からは除外して考えている。以上の定義によると、他者操作方略は、“利己的で高圧的に他者をコントロールして、自己の利益を得ようとする方略”であると考えられる。

しかし、Bursten (1972) が除外した“他者からケアを引き出そうとする方略”を他者操作方略の一部とする指摘も数多くある。Hofer (1989) は他者操作方略に対する臨床場面における関心は主に“Suicide Manipulator”にあるとしている。この他者操作方略は、死に至る危険があるほど自分を傷つけて他者の注意をひくことであるとされる。また、Gunderson (1984) も、“Borderline Personality Disorder”の患者を鑑別しうる重要な特徴の一つとして他者操作的な自殺企図を挙げている。日本においても、対人希求的な過剰非適切な要求として“他者操作性” (皆川, 1990) という用語が用いられている。これらの指摘は Bursten (1972) によって他者操作方略の定義から除外された“他者からケアを引き出そうとする方略”であると考えられ、この側面も他者操作方略として無視できない要素であると思われる。よって、他者操作方略は“利己的で高圧的に他者をコントロールして自己の利益を得ようとする方略”と“他者からのケアを引き出そうとする方略”という2側面に集約されると考えられる。

一方で健常群における他者操作方略としてマキャヴェリアニズム (Machiavellianism) があげられる。Cristie & Geis (1970) は、対人操作に成功する人の行動原理が、Machiavelli が君主論で主張しているような冷徹で利己的で、現実原理を重視するような特徴と似ていることを見出した。そして、自分の目的のために他者を操作しようとするという傾向が個人のパーソナリティの中にも見出せると考え、その傾向をマキャヴェリアニズムと命名した。Cristie & Geis (1970) は精神病理とマキャヴェリアニズムとの関連はごくわずかもしくは全くないとしており、マキャヴェリアニズムは健常群に特徴的な行動であると考えられる。マキャヴェリアニズムの概念は、臨床群における他者操作方略の概念のうち、

St. Clair (1966), Hamilton et al. (1986), Bursten (1972) らが指摘する“利己的で高圧的に他者をコントロールして自己の利益を得ようとするという方略”に類似しており、Hofer (1989), Gunderson (1984), 皆川ら (1990) の指摘する“他者からのケアを引き出そうとする方略”という観点は入っていない。さらに、マキャヴェリアニズムにおける性差について、女性が周囲を操作するにはマキャヴェリアニズムとはまた別の方略があるのではないかという議論や、マキャヴェリアニズムのような行動が男性と女性で異なる方法で用いられることを明らかにするべきだとする指摘がある (Singer, 1964; McHosky, 2000)。よって、マキャヴェリアニズムのみでは女性が周囲を操作する傾向を捉えきれない可能性が示唆される。

次に臨床群における他者操作方略の性差について考えてみたい。DSM-IV (APA, 1994) の記述より、“利己的で高圧的に他者をコントロールして自己の利益を得ようとする方略”は自己愛性人格障害に、“他者からのケアを引き出そうとする方略”は境界性人格障害に特徴的な行動に類似している。さらに、自己愛性人格障害は男性に多く (DSM-IV; APA, 1994)、境界性人格障害は女性に多い (Gunderson, 1988) という指摘がなされている。よって、“他者からのケアを引き出そうとする方略”という観点がマキャヴェリアニズムに足りないと考えられる女性特有の他者操作方略といえるのではないだろうか。

本研究では、マキャヴェリアニズムのみでは捉えきれなかった健常群の他者操作方略を“他者からのケアを引き出そうとする行動”の観点を含めることで包括的に捉えて、他者を操作する方略を測定する尺度を作成し、その信頼性・妥当性を検討することを目的とする。なお、本研究での他者操作方略の定義は、Hamilton et al. (1989) の定義を参考に“自分の利益のために巧妙な手段で故意に他者に影響を与えたりコントロールしようとする”とする。

予備調査

目的

本研究における他者操作方略は“利己的で高圧的に他者をコントロールして自分の利益を得ようとする行動”と、“他者からのケアを引き出そうとする行動”の2側面があると仮定している。他者操作方略が健常群にも存在するかどうか、存在するのであればどのようなものであるかを探索的に検討するため、自由記述法によって記述を収集し、得られた記

述を分類することを目的とする。

方法

調査対象者 関東圏内の大学生203名（男性116名・女性86名・未記入1名）。調査対象者の平均年齢は19.32歳であった。

調査方法 通常の授業時間内に質問紙を配布して調査を依頼し、回答終了後その場で回収した。

調査内容 「“自分にとって都合の良い反応を引き出すようなコミュニケーションの仕方”と聞いて思い浮かぶこと」について自由記述形式で回答を求めた。

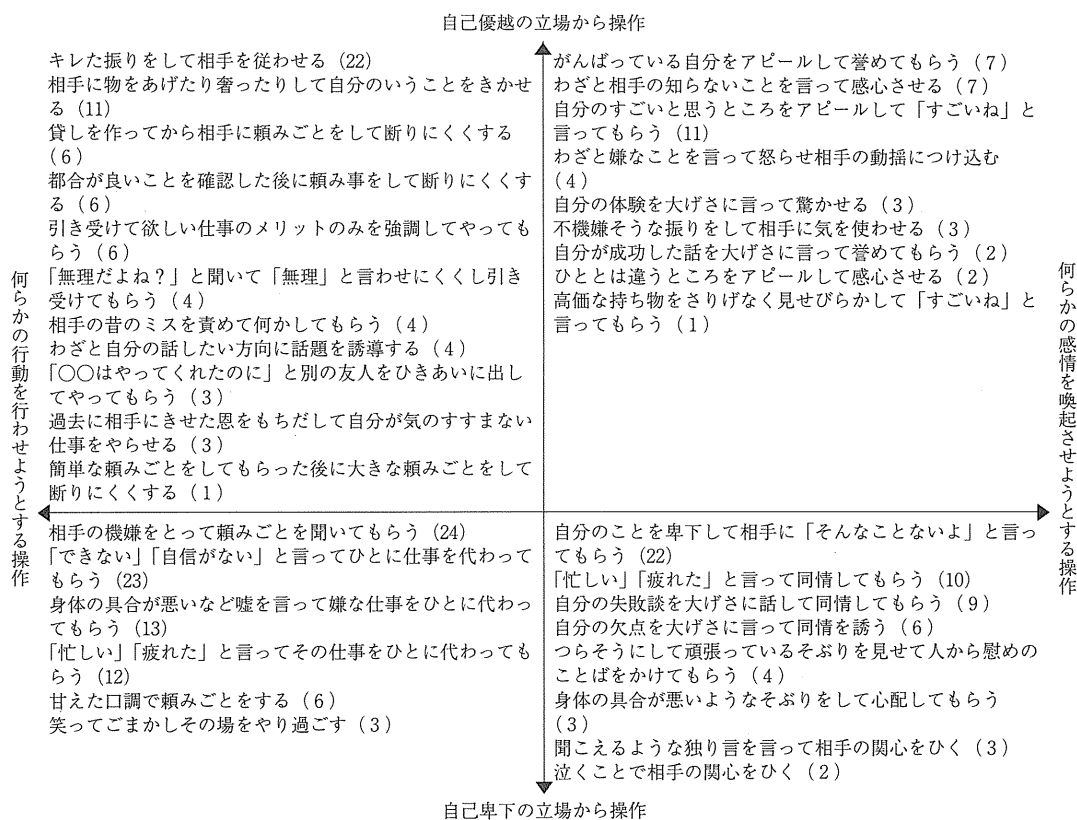
結果と考察

431個の自由記述が得られ、対象者一人平均2.07個の自由記述を行っていた。それらの自由記述は著者と心理学を専攻する大学院生4名によってKJ法（川喜多，1967）を用いて分類された。この際、質問の意図を理解していないと思われるものや意味が不明なため有効回答にならなかった記述（152個）

を除外した。

本研究での他者操作方略の観点から記述を分類したところ、2つの軸が見出された。1つ目の軸は“自己優越の立場から他者を操作するか、自己卑下の立場から他者を操作するか”という軸である。そしてもう1つの軸は“相手に何らかの行動を行わせようと操作するか、相手に何らかの感情を喚起させようと操作するか”という軸である。Fig. 1に、2軸内の記述の布置とその度数を示す。

本研究における他者操作方略では、“利己的で高圧的に他者をコントロールして自分の利益を得ようとする方略”と、“他者からのケアを引き出そうとする方略”の2側面を仮定していた。実際に得られた記述は“自己優越の立場から他者を操作するか、自己卑下の立場から他者を操作するか”という軸と“相手に何らかの感情を喚起させようと操作するか、相手に何らかの行動を行わせようと操作するか”という軸の2軸上、4象限に布置された。“自己優越の立場から他者を操作する”は何らかの行動を自己が他者よりも優越な立場にたつことで巧妙に強制的



注 () 内は度数

Fig. 1 項目の2軸上の布置とその度数

に行わせようと仕向けたり、自己の優越な立場をアピールすることで他者に自己の優越性を印象づけさせるような内容であった。高圧的であるとは言えないまでも、自己の優越な立場をアピールして強制的に何かをさせたり思わせるよう仕向けるという点で“利己的で高圧的に他者をコントロールし、自分の利益を得ようとする方略”と捉えられるのではないかと考えられる。また、“自己卑下の立場から他者を操作する”は自己の劣勢な立場をアピールして何かを手伝ってもらったり、自己を卑下して相手に同情心を引き起こさせるような内容であり、“他者からのケアを引き出そうとする方略”に合致するものと考えられる。

“自己優越の立場”“自己卑下の立場”ともに、高圧的すぎたり、自殺をほのめかすなどの内容が現れなかったのは健常群を対象にした調査であったからだと考えられる。しかし、内容的にはそれほど極端ではないものの臨床群の他者操作方略の延長線上にあるものと捉えてよいものと考えられる。

また、“他者の行動面を操作するか感情面を操作するか”という軸が得られたのは興味深い。道具的な利益を求めるか感情的な利益を求めるかという点に分かれたことは、臨床群に比べて健常群の方がよりはっきりとした目的をもって操作を行うためだと考えられる。

本調査

目的

予備調査で得られた記述をもとに“利己的で高圧的に他者をコントロールし、自分の利益を得ようとする方略”（自己優越の立場から操作）“他者からのケアを引き出そうとする方略”（自己卑下の立場から操作）の2側面、またそのうちそれぞれ操作対象の行動面を操作するか感情面を操作するかの4下位尺度からなる他者操作方略尺度を作成し、その信頼性・妥当性を検討することを目的とする。

方法

調査対象者 関東圏内の大学生402名（男性216名、女性176名、未記入10名）に質問紙を実施した。調査対象者の平均年齢は19.56歳であった。そのうち、79名（男性36名、女性42名）には再検査法による信頼性の検討を行うため、5週間の間隔を経て同一の調査を再度実施した。

調査方法 通常の授業時間内に質問紙を配布して調査を依頼し、回答終了後その場で回収した。

質問内容 予備調査の結果をもとに、“自己優越

の立場から他者を操作するか、自己卑下の立場から他者を操作するか”という軸と“相手に何らかの行動を行わせようと操作するか、相手に何らかの感情を喚起させようと操作するか”という軸の2軸上、4象限に布置される他者操作方略尺度27項目を独自に作成した。本研究では、“よくする”“しばしばする”“たまにする”“あまりしない”“めったにしない”“まったくしない”の6件法で回答を求めた。頻度を表わす形容詞を選択する際に、織田（1970）を参考にして選択肢間の等距離性が保たれるように考慮した。“あなたは人という時に、以下の項目にあるような行動をどの程度しようとしたことがありますか。‘よくする’‘しばしばする’‘たまにする’‘あまりしない’‘めったにしない’‘まったくしない’のうちあてはまるものに○をつけてください。”という指示で回答を求めた。

結果と考察

因子構造の検討 他者操作方略尺度27項目について最尤法による探索的因子分析を実施したところ、項目2“頼みごとをきいてもらおうとして甘えるような口調で話す”、項目3“自分の話したい話題にしようとして話を誘導する”、項目10“何かをしてもらおうとして「無理だよな？」と前もって聞いて「無理」と言わせてにくする”、項目15“相手の動揺につけこもうとしてわざと嫌なことを言って怒らせる”、項目21“自分のいうことをきいてもらおうとして相手に何かをおごったりする”、項目23“自分の仕事を手伝ってもらおうとして忙しいことをアピールする”の共通性がそれぞれ.25以下であったためこれらを削除し、再度21項目について最尤法・プロマックス回転による因子分析を行った。固有値の推移から4因子解が適当と判断した。プロマックス回転後、因子負荷量を得た（Table 1）。結果は尺度作成意図にほぼ合致するものであった。

第1因子は、項目17“「すごいね」と言ってもらおうとして自分のすごいと思うところをアピールする”、項目4“ほめてもらおうとしてがんばっている自分をアピールする”など計6項目からなっており、自分が相手よりも上の立場にたつて自らの優越性をアピールすることで、他者に何らかの感情を喚起させようとする操作と考えられ、第1因子を“自己優越的感情操作”と命名した。第2因子は、項目25“相手になくさめてもらおうとして自分の不運を大げさにばやく”、項目26“同情してもらおうとして自分の失敗談を大げさに話す”など計5項目からなっており、自分が相手よりも下の立場にたつて自らの能力や状況を低く見積もったものをアピールす

Table 1 他者操作方略尺度の因子分析結果（最尤法・プロマックス回転）

	因子負荷量				共通性
	第Ⅰ因子	第Ⅱ因子	第Ⅲ因子	第Ⅳ因子	
17 「すごいね」と言ってもらおうとして自分のすごいと思うところをアピールする	0.91	-0.05	-0.05	-0.09	0.66
4 ほめてもらおうとしてがんばっている自分をアピールする	0.71	-0.05	-0.16	0.05	0.42
19 感心してもらおうとしてひとは違うところをアピールする	0.70	0.02	0.04	-0.04	0.51
5 感心してもらおうとしてわざと相手の知らないことを言う	0.58	-0.07	0.03	0.19	0.44
14 ほめてもらおうとして自分の成功した話を大げさに言う	0.54	0.13	0.19	-0.09	0.48
22 驚かせようとして自分の体験を大げさに言う	0.44	0.14	0.04	0.04	0.34
25 相手になぐさめてもらおうとして自分の不運を大げさにぼやく	-0.08	0.94	-0.01	-0.12	0.67
26 同情してもらおうとして自分の失敗談を大げさに話す	-0.02	0.88	-0.02	-0.02	0.72
27 心配してもらおうとしてつらそうふりをする	0.12	0.67	-0.05	0.04	0.57
9 同情してもらおうとして自分の欠点を大げさに言う	-0.02	0.53	-0.01	0.20	0.41
18 相手に「そんなことないよ」と否定してもらおうとして自分を卑下する	0.26	0.42	0.06	-0.03	0.41
11 頼みごとをことわりによくさせようとして相手への昔の貸しをもちだす	-0.03	-0.05	0.94	-0.14	0.70
1 自分が気のすまない仕事をやってもらおうとして過去に相手に着せた恩をもちだす	0.03	-0.06	0.65	0.03	0.44
12 ことわりによくさせようとして都合がよいことを確認した後に頼み事をする	-0.02	0.09	0.57	0.01	0.37
8 仕事をもらおうとして「〇〇はやってくれたのに」と別の友人をひきあいに出す	-0.20	-0.02	0.51	0.25	0.35
13 仕事をもらおうとして相手にとって都合のよい交換条件を出す	0.13	0.00	0.43	-0.03	0.24
7 自分の仕事を手伝ってもらおうとしていかにも困っているふりをする	-0.09	-0.03	0.02	0.86	0.66
6 相手に仕事を代わってもらおうとして「自分にはできない」というふりをする	0.05	-0.07	-0.05	0.77	0.54
20 相手に仕事を代わってもらおうとして調子悪そうふりをする	0.08	0.15	0.09	0.43	0.41
16 「休んでいいよ」と言ってもらおうとして疲れたふりをする	0.19	0.21	0.00	0.32	0.39
23 自分の仕事を手伝ってもらおうとして忙しいことをアピールする	0.14	0.04	0.29	0.30	0.41

ることで、他者に何らかの感情を喚起させようとする操作と考えられ、第2因子を“自己卑下の感情操作”と命名した。第3因子は、項目11“頼みごとをことわりによくさせようとして相手への昔の貸しをもちだす”，項目1“自分が気のすまない仕事をやってもらおうとして過去に相手に着せた恩をもちだす”など計5項目からなっており、自分が相手よりも上の立場にたって自分の優越性をアピールすることで何かをしてもらおうとする操作と考えられ、第3因子を“自己優越的行動操作”と命名した。第4因子は、項目7“自分の仕事を手伝ってもらおうとしていかにも困っているふりをする”，項目6“相手に仕事を代わってもらおうとして「自分にはできない」というふりをする”など計5項目からなっており、自分が相手よりも下の立場にたって自らの能力や状況を低く見積もったものをアピールすることで何かをしてもらおうとする操作と考えられ、第4因子を“自己卑下の行動操作”と命名した。

探索的因子分析の結果、予備調査での分類通り、自己優越の立場か自己卑下の立場か、行動面を操作するか感情面を操作するか、の2軸からなる4因子に分類された。

妥当性の検討 因子構造に関する仮説（自己優越的感情操作・自己卑下の感情操作・自己優越的行動操作・自己卑下の行動操作の4因子からなる）を確

認するために、統計パッケージソフトSPSSAmos 4.0を用い、確認的因子分析を行った。分析結果について、適合度指標のGFI、AGFIおよびRMSEAを用いて評価を行った。GFI値は.91、AGFI値は.88、RMSEA値は.05であり、モデルの適合度は良いと評価された。よって、本尺度が自己優越的感情操作・自己卑下の感情操作・自己優越的行動操作・自己卑下の行動操作の4因子からなるとする仮説は支持され、他者操作方略尺度は因子的妥当性を備えた尺度であることが明らかにされた。

また、予備調査により準備された項目は、本研究での他者操作方略の定義を説明した上で心理学を専攻する大学院生とともに内容を吟味し、分類した。よって、本研究で作成された他者操作方略尺度の各項目については内容的妥当性を有しているものと考えられる。

信頼性の検討 まず、Cronbachの α 係数を用いて内的一貫性の検討を行った。その結果、尺度全体において.92、各下位尺度において自己優越的感情操作で.83、自己卑下の感情操作で.85、自己優越的行動操作で.75、自己卑下の行動操作で.81といずれも高い値を示した。よって、他者操作方略尺度の内的一貫性は満たされた。また、項目間の相関については、全て.63未満であったことから、項目間の相関が強いことによって内的一貫性が見かけ上高くなった可能性はきわめて低いと考えられる。また、

項目-全体間相関は $r = .41 \sim .71$ であり ($p < .01$), 全ての項目において中程度の正の相関が見られた。したがって, 他者操作方略尺度は内の一貫性の高い尺度であるといえる。尺度全体の内の一貫性が高いことから, 自己優越の立場からの操作も自己卑下の立場からの操作も相手を操作するという面では同様の行動であり, その手段が異なるものと考えられる。

次に, 再検査法による信頼性を検討するため, 他者操作方略尺度を5週間の間において, 関東圏内の大学生79名(男性36名, 女性42名)に実施した。各下位尺度ごとと, 尺度全体について検査・再検査間の相関係数を算出した。その結果, 尺度全体において.77, 各下位尺度において自己優越的感情操作で.77, 自己卑下の感情操作で.64, 自己優越の行動操作で.61, 自己卑下の行動操作で.72となり, 自己優越の行動操作に関しては.61とやや低い値であるが, その他の因子と尺度全体に関してはいずれも高い値を示しており, 尺度の安定性はほぼ確認された。自己優越の行動操作はその他の下位尺度と比較して, 特性要因よりも状況要因によって大きく左右される操作であることが考えられる。以上の結果より, 他者操作方略尺度は信頼性を備えた尺度であるといえる。

他者操作方略における性差の検討 他者操作方略尺度の各下位尺度ごとに他者操作方略の頻度に性差があるのかを検討するために, 各下位尺度ごとの男女における合計得点の平均値に対して t 検定を行った (Table 2)。その結果, 男女の平均値の差が有意傾向であったのは, 自己卑下の感情操作 ($t(378) = -1.93, p < .10$) であった。女性の方が男性よりも自己卑下の感情操作を多く行う傾向にあった。また, 男女の平均値の差が有意であったのは, 自己優越の行動操作 ($t(387) = 2.64, p < .01$) であった。男性の方が女性よりも自己優越の行動操作を多く行っていた。これらの結果から, 自己卑下の立場にたつて他者のケアを引き出そうとする操作はどちらかといえば女性に, 自己優越の立場にたつて他者を

高圧的にコントロールしようとする操作はどちらかといえば男性に多いといえる。よって, Singer (1964) が指摘するマキャベリアニズムとは別の女性特有の他者操作方略とは, 自分を相手の下位に置くことでケアを引き出すよう操作することであると推察される。

まとめと今後の課題

本研究では, 女性が周囲を操作するにはマキャヴェリアニズムとはまた別の方略があるのではないかと, マキャベリアニズムのような行動が男性と女性で異なる方法で用いられることを明らかにするべきである等の指摘 (Singer, 1964; McHosky, 2000) を受けて, マキャヴェリアニズムのみでは捉えきれなかった健常群における他者を操作する傾向を測定する尺度を作成し, その信頼性・妥当性を検討した。その際, 臨床群における他者操作方略の概念を参考にし, “他者からのケアを引き出そうとする方略”の観点を含めることで他者を操作する方略を包括的に捉えた。

まず予備調査において自由記述法により他者操作方略に関する記述を収集し, 分類した結果, 収集された記述は“自己優越の立場から他者を操作するか, 自己卑下の立場から他者を操作するか”という軸と“相手に何らかの感情を喚起させようとする操作するか, 相手に何らかの行動を行わせようとする操作するか”という軸の2軸上に布置された。よって, 健常群の他者を操作する方略は程度の差はあるものの臨床群の他者操作方略の延長線上にあるものと考えられた。また, 高圧的な操作という意味合いの濃いマキャヴェリアニズムの概念以外にも自分を相手より下位に置くことで他者のケアを引き出そうとする他者操作方略も存在することが確認された。

次に, 予備調査で収集された記述をもとに21項目からなる他者操作方略尺度を作成した。探索的因子分析の結果, 他者操作方略尺度は“自己優越の行動操作”“自己卑下の行動操作”“自己優越的感情操

Table 2 他者操作方略尺度の各下位尺度の男女別の合計得点の平均と標準偏差および t 値

	男性			女性			t 値
	N	Mean	SD	N	Mean	SD	
自己優越の行動操作	213	13.03	4.26	176	11.91	5.56	2.64**
自己卑下の行動操作	215	12.84	4.44	176	13.18	5.27	-0.75
自己優越的感情操作	215	18.74	5.59	171	18.31	4.03	0.75
自己卑下の感情操作	207	12.90	4.91	173	13.91	4.42	-1.93†

注) † $p < .10$ ** $p < .01$

作” “自己卑下の感情操作” の4因子からなっていた。また、他者操作方略尺度の因子的妥当性・内容の妥当性、内的一貫性・再検査信頼性が確認され、本尺度が妥当性と信頼性を備えた尺度であることが示された。しかし、本研究においては構成概念妥当性の検討はされていないため、今後さらに妥当性の検討を行う必要がある。

各下位尺度の性差を検討した結果、自己優越的行動操作は男性に、自己卑下の感情操作は女性に多かったため、Singer (1964) の指摘するマキャベリアニズムとは別の女性特有の他者操作方略とは、自分を相手の下位に置くことでケアを引き出すよう操作する方略であると推察される。本研究で作成された他者操作方略尺度により、今後マキャベリアニズムのみでは捉えきれなかった他者を操作する方略について検討することが可能になるものと考えられる。

引用文献

- American Psychiatric Association. 1994 Diagnostic and statistical manual of mental disorders. 4th ed.-R. The American Psychiatric Association.
- Bursten, B. 1972 The Manipulative personality. *Archives of General Psychiatry*, 26, 318-321.
- St. Clair, H.R. 1966 Manipulation. *Comprehensive psychiatry*, 7(4), 248-258.
- Christie, R., & Geis, F.L. (Eds.) 1970 Studies in Machiavellianism. Academic Press.
- J・G・ガンダーソン 松本雅彦・石坂好樹・金 吉晴 (訳) 1988 境界パーソナリティ障害—その臨床病理と治療— 岩崎学術出版社
- (Gunderson J.G. 1984 Boederline pesonality disorder. Washington DC: American Psychiatric Press Inc.)
- Gunderson, J.G. 1988 Personality disorders. In: The new Harverd Guide to Psychiatry, Nicholi, A.M. (Ed.) The Belknap Press of Harverd Univ., Pp337-357.
- Hamilton, J.D., Decker, N., & Rumbaut, R.D. 1986 The Manipulative patient. *American Journal of Psychotherapy*, 40(2), 189-200.
- Hofer, P. 1989 The role of manipulation in the antisocial personality. *International Journal of offender therapy and comparative criminology*, 33 (2), 91-101.
- 川喜多二郎 1967 発想法 中央公論社
- 恵 智彦・衣笠隆幸・伊藤 洸 1996 境界例とその周辺 金剛出版
- McHoskey, J.W. 2000 Machiavellinism and personality dysfunction. *Personality and Individual Differences*, 31, 791-798.
- 皆川邦直 1990 境界例の初期診断と対応 精神科治療学, 5(6), 749-756.
- 無籐清子 2002 個人カウンセリングにおけるアサーションの意味 平木典子・沢崎達夫・土沼雅子 (編) カウンセラーのためのアサーション 金子書房
- 織田揮準 1970 日本語の程度量表現用語に関する研究 教育心理学研究, 18, 166-176.
- Singer, J.E. 1964 The use of manipulative strategies: Machiavellianism and attractiveness. *Sociometry*, 27(2), 128.150.

(受稿3月18日：受理5月19日)